14. 前田週二　氷見市立十三中学校鬼蓮観察池のオニバス

15. 高山茂樹　カモガイのコロニーの生態、孵化直前のコウイカの子供、カラマツガイの観察、モスソガイ、アズマニシキガイ、ヒメイトマキヒタチオビガイ、コウイカの交尾、カラフデガイ

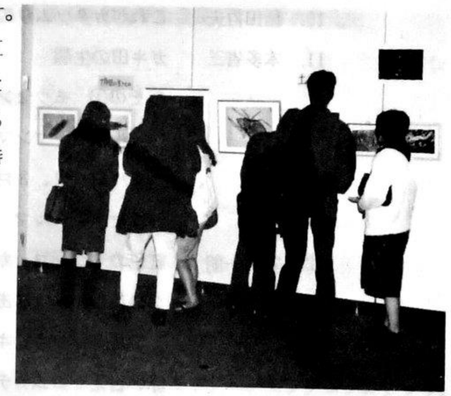
16. 本瀬晴雄　シロバナハマナス、シロバナツルリンドウ、オヰミズアオ、モンキアゲハ、ホシホウジャク、シロバナトクワカソウ、シロバナハマヒルガオ

17. 若林一成　自然の中で木と遊ぶ、厳冬に絶えて美しく、コメツガの老樹にサルオガセのつららー、黒部峡谷の木々の枝振り、道祖神「地蔵」と木々、再生する若木、高山の木々のたくましさ、人工的な川と自然美ー立山カルデラ、高山の木のたくましさーコメツガの枝と萌芽

18. 本瀬　薫　ユキツバキ、ヤブツバキ、ユキバタツバキ、キツリフネ、ウスキツリフネ

このようにして、創立65周年記念大会は盛会でありましたが、中でも研究発表の「カガバイの産卵について」や「日本海沿岸のタブノキ林と呼称の地域性」は興味あるものとして注目されました。また、豊かな富山の自然をテーマに開催された生物写真展は大変好評で、連日沢山の人々が参観し、土壌動物の拡大写真、カイの産卵やイカの交尾の写真、ユキツバキとヤブツバキの写真、多くの昆虫の写真、時間を追ったオニバスの開花の写真、立山のガキ田の生態写真など、特に好評でした。

ところで、ここ約20年をふりかえってみますと、おおよそ5年毎に本生物学会は記念大会を開催してきています。そしてその記念大会毎に新しい生物学会の方向をめざして活動を続けてきました。そしてこの65周年を迎えたわけです。65周年の行事を終え、考えますことは、いよいよ本生物学会が新しい時代に沿って変革しなければならないということです。多くの生物を研究する人たちがより専門的に、より深く生物の一分野を研究するようになり、生物に関する学会や研究会も沢山でてくるようになりました。その中で本生物学会の行方を考える時、本当に多くの困難を感ずる訳ですが、歴史ある本生物学会をどのように続けていくか、いかに発展させていくかの具体的な方策をお互い出し合って早急に検討する必要があると思われます。例えば、研究発表会を重視する立場で、会員相互の研究の情報交換やディスカッションを深めるために、研究発表会を一日にする、総会など機会あるごとに研究発表を組み込んでいく、といった持続的な活動の必要性が痛感されます。



生物写真展状況

故植木忠夫先生を偲ぶ

1. 故植木忠夫先生に期待した本学会の将来

本多啓七

植木先生が富山県生物学会の第3代会長となられた際に、新しく副会長制を設けられ、不肖私がこの席で会長を補佐することになりました。植木先生を会長に推戴したのは前会長の進野久五郎先生がこの学会の創立以来お世話をしていただき、しかも18年間の長い間第2代会長を務めておられたのでこの際、以前に富山博物学会から分離独立した富山県地学会の例に習い、会長を富山大学の先生から選ぶ様式を取っていただきたいとの会員一同の要望にこたえたものでありました。

事務局においても昭和30年から35年にわたって富山大学にあって、堀令司先生がいろいろと事務的な指導をなさいました。この以前は富山中部高校に事務局があって山本利彦先生がこの任に当られました。事務局が大学に移管したのは大学独自の立場から必要性が絡んでいたのですが、今後末永く大学に事務局のあることを願い、しかも会長も大学の中から選ばれることを考えていたのですが、その後事務局は大学の多忙のため辞退されました。そのため新しく設置された富山県理科教育センター所長の平崎菊太郎先生にお願いして生物室に事務局を置くことになりました。しかし日本生物教育全国大会を富山で行なう際にはこの生物学会が関与せずとの結果から、当時富山県高校生物研究会の島木会長を中心として、小．中．高校合同の富山県生物教育研究会を設置して、全国大会を行ないました。ここで新しく設置された生物教育研究会と生物学会両者の事務局を富山県理科教育センターに置くことが出来ないので、教育関係の前者をそのまま理科教育センターに置き、後者を筆者が所長代理の立場から今度赴任した上市中学校に置くことにしました。

このように事務局については苦労したが、植木先生が会長となられると坂下栄作先生が富山女大附属高校の生物教師であったため、再度事務局を引き受けられました。

われわれの生物学会では富山県地学学会と同じように富山大学で会長と事務局を引き受けられ新しい時代に応じた若い会員を多数網羅して何時までも若々しいエネルギーの充満した学会に発展することを願っていました。その意味で植木先生が会長を辞退された際に小林先生にお願いし承諾を受けました。しかし事務局は多忙のため他所でやってほしいとの事でやむを得ず4年間は富山県科学教育センターに移管しました。その後私は私立富山第一高校に務めたので、事務局を私宅に移しました。本多省三を事務局長として16年間に亘って世話をしてきました。

新年度は是非この学会の会長と事務局を富山大学に置かれることを願ってやみません。これがまた当学会の昔からの願いであります。

植木先生の温和で多才の人柄や専門分野については他の会員が述べられるので省略します。

2　故植木忠夫先生の思い出

田　中　忠　次

昭和10年頃、私がはじめて富山博物学会に入会し、研究発表会に出席した時の事である。開会後少し遅れてはいって来て、前の席にゆったりと座られた方がある。大変偉い先生なのだろうと思った。それが植木先生を知ったはじめである。私がはじめて研究発表をした時、今思えば赤面物の発表であったが、質問して下さったり、あとで激励して下さったのであった。それがまことに嬉しく、どれ程励みになったことか。先生は常にこのようにして後進を励まし育てられた方である。

先生は立山に魅せられて、故郷の大分県に帰らず富山にとどまったとよく話をされた。それ程立山が好きで立山を愛されたことは、立山山系及び周辺地域の食虫類、称名渓谷を中心とする哺乳類、立山の動物、立山の鳥獣目録、富山県のライチョウ、ミクリガ池やミドリガ池など湖沼群の調査など、数々の記録をものにされたことによっても伺い知ることができる。また富山新聞社の事業として実施された立山称名滝総合調査団の団長として精励され私達も大変勉強させて頂いた。これは思い出の調査で、その成果の「立山－称名滝とその渓谷を探る－（1950、富山新聞社）」は大切な文献として保存している。

戦後富山県教育会主催の立山現地指導会が数年行われた。講師は植木・進野両先生が最高指導者で他に3～4名の指導者がこれにあたった。千寿ケ原の駅（現立山駅）からケーブルに乗車するのであるが、客が多く混雑するため、参加者全員外に集合し、主たる指導講師がお話をされた。植木先生がその度ごとにタケニグサ（チャンパギク）をとって、「これはケナシチャンパギクといって、この茎の汁はいんきん・たむしの妙薬である」と紹介されたものである。不思議なことにこのユーモラスなことが今でも脳裡に焼きついている。

富山医科薬科大学の上村清博士がライチョウに寄生する原生植物の1新種を発見され、ライチョウ研究の先駆者であり、功績の大きい植木先生にちなんでEimeria uekiiと命名された。先生はこのことを大変喜ばれ、このことが報道された1981年11月2日付北日本新聞の切り抜き、同年3月7日付朝日新聞のライチョウ生態研究会（会長植木忠夫）が11日から調査にはいることの切り抜き、同年11月24日付北日本新聞風紋欄に書かれた「楽器遍歴」の切り抜きを組みあわせ、私からお送りした富山市科学文化センターで開催された特別展を解説した県昆虫同好会の「富山に生きる昆虫たち」に対する感想、上村博士とのおつきあいのこと、その他について長い私信を加えてコピーし送って下さった。先生の巾広く温かいお気持がしみじみ感じとられたことであった。

3.　思慕　故植木忠夫先生

山　岡　正　尾

植木先生との出合いは50年余りも前，まだ本会の前身，富山博物学会と言っていたころの…昭和15年秋の例会に初めて出席させていただいた。その頃であったと思う。富山中学校（今の富山高校）か富山女子師範の会議室が例会会場であり，まだ学会に入会していなかったので進野久五郎先生に連れて行ってもらった。先生の勧めに従ったのである。当時私は富山師範の専攻科生であり，進野先生のもとで植物学を学んでいた。ちょうどこの年の夏，立山称名滝近辺の八郎坂でヒカリゴケを見つけ，その観察・調査のため現地にたびたび出かけたりしていた。富山県ではもちろん，北陸地区でも未記録だとのことであり，それらの事の紹介にあわせて仲間入りさせていただいたようである。

これを契機に，富山高等学校（岩瀬の高等学校と言っていた）の教授・動物学の植木先生との長いおつきあいをさせていただくこととなった。言うまでもなく先生の深く広い御学識，気品と温和なお人柄，さわやかなユーモア…。この50有余年を回顧するとき，限りなく畏敬と親近の思いにかられ懐旧の念を禁じ得ない。

1　講習会でのさまざまなこと

植木先生から長期にわたり講義を受け，従って思い出の質・量ともに多いのが「富山県中等学校理数科教員臨時養成講習」（以下「中理臨講」とよぶ）であった。これは昭和19年秋から年末にかけての3箇月，県が中等学校の科学教育推進，出征による中等学校の教員不足の補充，撃ちてし止まんの戦意高揚などを目的として企画したものであった。これには，県内あちこちの中学校・女学校・国民学校の教員中から選抜された者・生物組で9人，うち1人はどうしたことか最初から欠席であったから8人。私はそのうちの1人であった。

(1)　動物学の講義はじまる

初日，開講式は富山市蓮町の富山高校の一教室で。開講式とは名ばかりで，すぐに講義がはじまる。教壇に立っていた者どもが，この日から毎日講師先生の講義を神妙に拝聴し，実験実習，ノートの整理や報告書の準備などに追われることとなった。動物学の主講義は当然植木先生であった。が，かつ

図１　実験室の植木先生。この写真の裏に図２の短歌一首が書かれている。

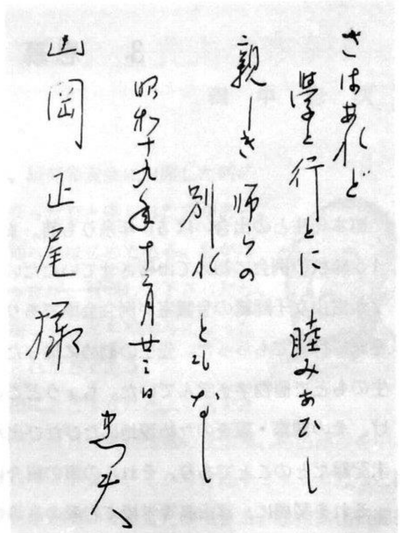


図２　「中理臨講」修了の日に植木先生から頂いた先生の写真の裏書き。短歌一首。

て富山高校においでになり，陸・海産の貝類の，主として分類の研究で高名な菊池勘左衛門先生が，県立高岡中学校長の多忙な職にありながら，時間をさいて指導においでくださった。因みに，植物学は富山県師範学校の進野久五郎先生，地理学は富山高校の石井逸太郎先生であった。

「木を植えるに忠なる夫（おとこ）ですが，どうしたことか動物学を，そして富山の人と自然が好きになり，とうとう富山に住みついてしまいました…」。これが植木先生の自己紹介のお言葉。

講義と言っても教科書は特にこれというものはなかった。しかし　①　佐藤和韓（わかし）鵄著（昭１５）生物学実験法，②　同著（昭１８）新制生物の研究，③　小松春三著（昭１６）自然科学教本などという本が主な参考書兼教科書であったと言える。①②は植木先生激賞の本であったが③は誤植が多く，先生も講義しながら訂正に忙しい…というひどいものであった。今この本を開いてみると記憶にあるとおり，どのページも訂正・補足箇所が十指に余る程である。こんなお粗末も，戦時の物資不足，人手不足の事態の反映であったのかも知れない。

ただ，教科書のたぐいには書いてないような，とっておきのお話が，さりげなく先生の口から漏れる。これはノートどころではなく誰もが顎をおとして開き入る。例えば，レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたという人体生理の図，ヘルン文庫・小泉八雲のこと，モリアオガエルの産卵の場面，温泉場

の情景…別府（先生の御郷里）のこと，あるいは次の項に書くHodenの事など多種多彩である。

(2)　宝殿とHoden

国鉄（今はＪＲ）山陽本線をドイツ人と一緒に乗ると困る事がある。彼らは，めんくらい，そして笑いこける。それは「宝殿」の駅でのこと。列車が着くと駅員が声をはりあげて「ほうで～ん，ほうで～ん」と。「ほうでん」はドイツ語の「ホーデン」Hodenであるから「睾丸，睾丸」「きんたま」「きんたま」と呼んでいることになる。彼らが驚くのも無理からぬ次第との話が，ヒトの細胞の染色体の講義の中で，ちょっとした息抜き。そして，Hodenは普通の男性では必ず左右の大きさが同じでない，と。大小の出現率も聞かされた。残念ながらその数値は記憶していない。

因みに山陽本線は，こちらから行けば「ひめじ」の手前３つ目が「ほうでん」である。本稿を書きながら角川日本地名大辞典・２８・兵庫県を開いてみた。「宝殿」は載っていないようであるが「宝田町・ほうでんちょう」が今の神戸市須磨区にあると書いてある。むかし，このあたりは良田が多かった。それが地名の由来とのこと。なお，地名ではなく人名…「宝田」姓の友人がいる。これは「たからだ」と訓読する。音読で「ほうでん」と言うと彼はおどけて眼とは逆に怒った素振りをする。こんな時そばにいる誰かは，その意趣を計りかねて，きょとんとしているのも漫画的でおもしろい。

図３　「中理臨講」の修了記念誌「八紘」の表紙（上）と同誌に掲載の恩師と受講生のイラストの中にある「植木先生…講義　Hoden」。
＜奥野良作受講生描く，昭19.12.23.1944＞

「ヒトのHodenを，しかも若くて，いきのいいのばかりをかき集めるために満州（今の中国東北地区）へ，たびたび出かけた男がいる。新しいのが入手できそうだとの情報が入ると，何はともあれ，すっ飛んで行ったその男…当時，染色体研究の第一人者Ｋ・Ｏ博士である」と。この時の研究にお役に立った若くて，いきのいいHodenは，たいてい大陸での処刑者のものだった

らしい。

(3) ヒトのSpermatozoon，そのプレパラート作り

「健康な男性であれば１回分のSamenの量は2〜6CC。(平均3.5CC)。その1CCの中には5000万〜１億5000万(平均１億)のSpermatozoon。2000万以下であれば受胎は無理。卵子と出合って，めでたく授精を果たす幸運は僅かに５億分の１。『精子は自然が作った最も精巧な細胞』といわれ，オタマジャクシのような形をしていて，長さは約６μ，頭部はデオキシリボ核酸からできていて，遺伝を司る…」。こんなお話を聞いているうちに，精子のプレパラート標本を作ってみようと誰かが発案。皆，賛成ではあるが，かんじんのSamenを誰が提供する？。ところが高岡から来ているT氏が翌日それを持参した。顕微鏡下で少し鈍いが，しきりに動くSpermatozoon。誰も彼も息をひそめて視野の中の不思議さに感動!!　デッキグラスに定着・乾燥・脱水・染色。カナダバルサムで封じ，カバーグラスをかける。まあまあの出来具合。てんでに仕上がりをあれこれ言いつつラベルを貼り終えて，朝から一日の労苦がみのったわけである。ところが翌日，教室の机の中に入れて置いたそれが無くなっている。学生らが持ち去ったのであろう…とのこと。彼らにはドイツ語は読める。プレパラートの中味がわかるわけだから，そうにちがいない。かと言って，どうしようもない。まことに残念な思いで，この一件は幕切れ。

(4) 猫肉試食とエチルアルコール準飲

犬の肉を食ったとか，まむしを食ったなどはよくあること，まだ「げてもの食い」のうちに入らぬ。ナメクジの天ぷら，カブトムシのつくだ煮となると珍しいなどと，だれかが出した話題に花が咲き猫肉を食べてみることとなった。だが，妖怪，鍋島の猫騒動は言わずもがな，子供のころから化け猫の「妄念」などと聞かされているから，薄気味悪いこと甚だしい。しかし，この試食は，科学者気質(かたぎ)？が，習俗的妄信へのささやかな抵抗の試みというものであったのかも知れない。

数日後，黒猫の死体が某君によって研究室に運びこまれた。昨夜扼(やく)殺，即称名念仏供養したから安心を——とのこと。待ちかまえていた(かどうか)皆のもの，解剖台，解剖皿，解剖ばさみ，メスなどを駆使。解剖学の実習よろしく，間もなく美しい肉のこま切れが解剖皿に盛られ，それが野菜ぬきのすき焼風に味付けされる。

さあ試食だ!　シャレーが皿がわり，箸は何であったか記憶にないが，ともかく一切れつまみあげる。先生方も私らも，やや躊躇(ちゅうちょ)，顔を見合わせてから口にほおり込む。悪い味ではない。でも多く食べる気がせず，味はまあまあだ——ということで，ことは終わった次第である。

次にエチルアルコールの試飲だが，これは研究室用のアルコールの持ち出しから始まる。よからぬことながら乞黙認を…というわけ。この企みは単なる試飲ではなく，「中理臨講」も終末(昭和１９年１２月２３日修了)に近づき，いわばお別れの宴(うたげ)であって，お３人の先生を招待，懇親の時を持とうというものである。清酒は苦労して少しばかり用意したものの，これだけで１０人余りの口には心もとない。そこで思いついたのが，このアルコールであった。このころメチルアルコールを飲んで一命を落とすものが時々あったから，これが確かにエチルアルコールで有毒でないと知りながら，初めてとあれば，いささか不気味だった記憶が未だ風化していないのである。なお，この時は野菜や調味料などを持ち寄り，肉は猫肉ではなく氷見の某君が奮発してくれたニワトリ１羽，正真正銘の鶏肉であった。宴の会場には近くのお寺の奥座敷を拝借した。<この項は「菊池先生の思い出(1981)　佐渡博物館研究報告　第８集p.１１〜１３のうちから転載した>

2　二人の佐藤教授

先生から頂いた論文の別刷りがたくさんある。その中にクロサンショウウオ・ヒダサンショウウオ・ハコネサンショウウオなどサンショウウオがたびたび出てくる。あのころオオサンショウウオが先生の研究室の大きな水槽に飼われていた。初めて見て大きさと無気味さに驚いたものである。ところでサンショウウオに関する先生の論文には必ず佐藤井岐(いきお)雄著「日本有尾類総説」(1943，昭１８)が文献としてあげられている。佐藤井岐雄博士(広島大学教授)は　前述の「生物学実験法」や「新制生物の研究」の著者佐藤和韓鵡教授(金沢高等師範学校)の兄上である。私は「中理臨講」の頃は二人の佐藤教授は全く知らず，ただ植木先生が激賞される二人のことを聞いて，その名前と業績を少し知り得たに過ぎない。ところが不思議なめぐりあわせで，突然，上市国民学校訓導から，金沢高等師範学校助教授にという文部省の辞令一枚で，召集の赤紙をもらったような思いのまま金沢高師に着任したのが昭和２０年の春，それが珍しい名前だとかねて思っていた佐藤和韓鵡教授の所であった。そして，終戦前後の激動の時期，原始林の生態調査のため中国地方や九州に佐藤教授のお伴をして何回か出かけた。そのうちの１回，終戦直前の７月末(このあと間もなく終戦になるなど思いもしなかったころ)に，広島県神辺町の吉岡紡績・金沢高師の学生の家で旅装を解き，こわくて，ひもじい長旅の疲れをいやしていた数日間。そこへ，ひょっこり広島大学の佐藤井岐雄教授が御舎弟和韓鵡教授を訪ねてみえた。その時，前述の「日本有尾類総説」を１冊持参。それを見て５００ページ程の部厚い書物には驚倒される思いであった。

その日の昼食は名ばかり，と言っても吉岡家のもてなしによる美酒・珍味。当時としてはまばゆい

ばかりの豪華な，私ら３人の会食。幸い空襲警報もなく別天地さながらの一時を過ごした。井岐雄教授は泊りもせず辞去された。

「井岐雄」というのは，両親のおくにが福井・岐阜両県，その２字をとったとのこと。「和韓鵄」の和は日本，韓は韓国，鵄は金鵄勲章の鵄であり，日韓併合の意義深いとき，その金鵄にあやかりたい親心とのこと。＜日韓併合は明治４３年８月２２日，皇紀2570年，西暦1910年であった＞

余談になるが―― 金沢高師への帰路は敦賀・福井を避けるため，予定を大阪・京都・米原・岐阜回り，高山線で富山，そして金沢へとした。富山には薄暮に到着。それから防空壕に入ったり出たり。数時間後にようやく着いた汽車に強引に割り込み乗車。それが空襲警報のただ中を発車して神通川の鉄橋を渡り切らぬうちに富山駅には爆弾の雨（となったらしく），汽車は呉羽駅で様子うかがう如く，急いで発車。次の小杉駅着と同時に機関車の火が消され，列車は暗やみの中での立往生。人びとは一夜，焼ける富山の空を呉羽の山稜越しに見て嘆き，火炎の色に照り輝きながら西から東へ流れ行くＢ２９の編隊に，ただただ憤怒。しかし，どうしようもなく天空を睨む。駅構内の砂利っ原に横臥して寸秒の流れを遅しと待ち，ようやく暁天に祈る結果となった。―― 植木先生は，どうなされたであろか。心がいたんだ。

3　「天の夕顔」文学碑

中河与一の名作「天の夕顔」に因んで，有峰・大多和峠に文学碑を建てることが先生多年の念願であったと聞いている。自ら建碑委員長となられ，昭和３７年８月５日（１９６２年）除幕。このあと「天の夕顔」作者らと薬師岳の自然探勝したことが，昭和３８年の年賀状に書かれている。また，著書「太刀の高嶺を仰ぎつつ」昭和４１年（１９６６）p.８９～９２に書かれている。このように建碑達成のお喜びは格別であったと伺っている。さもありなんと思われる。

「天の夕顔」を初めて読んだのが，いつであったか私は記憶していない。が，植木先生の文学碑建立のことを知り，改めて念入りに読んでみた。薬師ケ嶽・立山・黒部・有峰・立山泉温・大多和峠（大和田峠と書いてある）などが第五章，第六章に出てくる。「…そしてやつと三日目に，大和田峠から這入つてこれに成功する事が出来たのです。その時は親しい猟師頭の西に案内役をたのみ…（中略）。嘗て二三日ゐた有峰の盆地に着くと，そこにはまだ雪が三四尺も残つてゐるといふ有様で…（中略）」とさらに文章が続く。「有峰の盆地」が今は有峰湖である。

さて，「天の夕顔」の発表は作者４１歳の時，昭和１３年（１９３８）１月「日本評論」に，次いで９月に三和書房から一冊の本として初版出版。以来今日まで２０種余りの本が出ているという。そして驚くべきことは海外…英・仏・独・米・中国・スペインなどで翻訳出版され，それぞれに好評と聞く。また国内版にも日・英・仏対訳本がある。文庫本などで今なお版を重ねているようである。清

冽な青春文学として半世紀以上にわたり読み継がれてきた名作の舞台の一部，その山河がすぐそこにあるのだと思うと，植木先生があれ程「天の夕顔」にかけられた心情が，ひしひしと伝わってくるように思われる。頂いた色紙の揮毫が「山河美」で「為山岡正尾愛兄」「忠夫書」である。

植木先生の「天の夕顔」談義に刺激されて以来これらの本を集めるようになり，古書店などに出かける。今ようやく１０種の本が集まった。その中に最初の単行本出版の三和書房・昭和１４年６月20日，第１版発行がある。Ａ５判，１７４ページ分が小説で，そのあとの２３ページ分が永井荷風・与謝野晶子ほか相馬御風ら１０氏の「天の夕顔に寄せる文」で埋められている。定価は１円３０銭，古書店の売値が２３００円（昭和63.1.1）。

4　「荒川越峰」雷鳥写真展

植木先生の永年にわたる立山の雷鳥の研究調査・保護活動が，学会への貢献・自然愛護思想の啓蒙普及となり，先生の輝かしい業績の一つになっている。標題の写真展は，昭和５２年の愛鳥週間に富山県を会場として「全国野鳥保護のつどい」が催された時の記念行事の一つである。越峰さんは本職が棟梁であるが，立山の雷鳥に魅せられて撮り続けた雷鳥の四季の生態写真。それは学術的にも貴重なもので，かつ鑑賞するに価するすばらしいものである。先生は終日この会場においでになった。私はここで記念の色紙に揮毫を頂戴した。（図４）。「別山の岩場に迷ひし甲斐ありてまのあたり見つ雷鳥三羽　為山岡正尾仁兄　喜寿　忠夫書」。

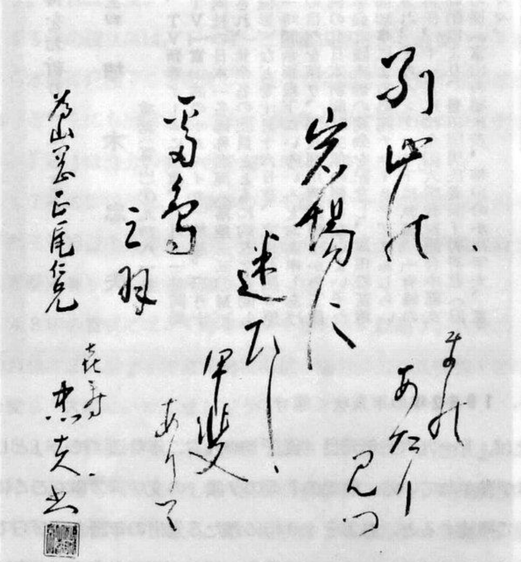
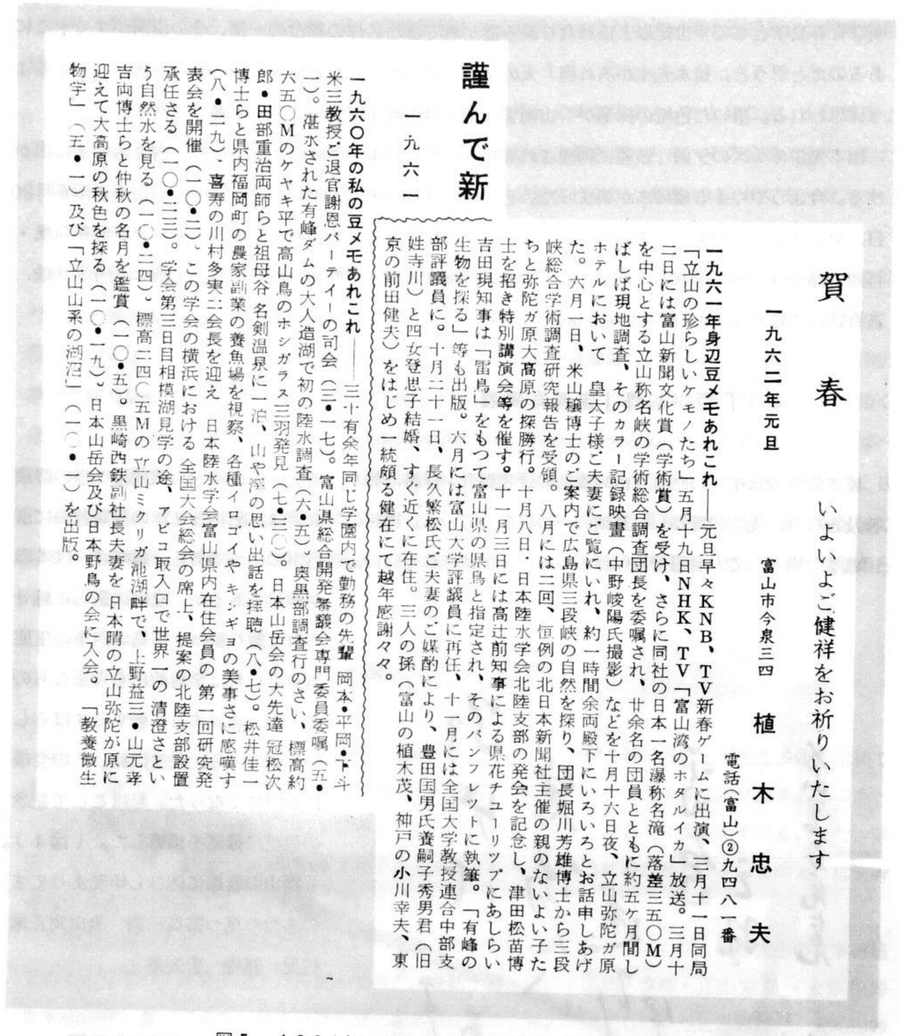


図４　荒川越峰雷鳥写真展の記念に頂いた色紙

5　年賀状拝誦

およそ４０年分の束の中の植木先生から頂いた年賀状を，１日がかりで探し出した。見当たらない年もあるが，それは僅かで三十数年分がそ



謹んで新

一九六一

賀春

いよいよご健祥をお祈りいたします

一九六二年元旦

富山市今泉三四　植木忠夫

電話（富山）②九四八一番

一九六一年身辺豆メモあれこれ――元旦早々KNB、TV新春ゲームに出演、三月十一日同局「立山の珍らしいケモノたち」五月十九日NHK、TV「富山湾のホタルイカ」放送。三月十二日には富山新聞文化賞（学術賞）を受け、さらに同社の日本一名瀑称名滝（落差三五〇M）を中心とする立山称名峡の学術総合調査団長を委嘱され、廿余名の団員とともに約五ヶ月間しばしば現地調査、そのカラー記録映畫（中野峻陽氏撮影）などを十月十六日夜、立山弥陀ガ原ホテルにおいて　皇太子様ご夫妻にご覧にいれ、約一時間余両殿下にいろいろとお話申しあげた。六月一日、米山穣博士のご案内で広島県三段峡の自然を探り、団長堀川芳雄博士から三段峡総合学術調査研究報告を受領。八月には二回、恒例の北日本新聞社主催の親のないよい子たちと弥陀ガ原大高原の探勝行。十月八日・日本陸水学会北陸支部の発会を記念し、津田松苗博士を招き特別講演会等を催す。十一月三日には高辻前知事による県花チューリップにあしらい吉田現知事は「雷鳥」をもつて富山県の県鳥と指定され、そのパンフレットに執筆。「有峰の生物を探る」等も出版。六月には富山大学評議員に再任、十一月には全国大学教授連合中部支部評議員に。十月二十一日、長久繁松氏ご夫妻のご媒酌により、豊田国男氏養嗣子秀男君（旧姓寺川）と四女登思子結婚、すぐ近くに在住。三人の孫（富山の植木茂、神戸の小川幸夫、東京の前田健夫）をはじめ一統頗る健在にて越年慶謝々々。

一九六〇年の私の豆メモあれこれ――三十有余年同じ学園内で勤務の先輩　岡本・平岡・下斗米三教授ご退官謝恩パーティーの司会（一一・一七）。富山県総合開発審議会専門委員委嘱（五・一）。湛水された有峰ダムの大人造湖で初の陸水調査（六・五）。奥黒部調査行のさい、標高約六五〇Mのケヤキ平で高山鳥のホシガラス三羽発見（七・三〇）。日本山岳会の大先達　冠松次郎・田部重治両師らと祖母谷名剣温泉に一泊、山や渓の思い出話を拝聴（八・七）。松井佳一博士らと県内福岡町の農家副業の養魚場を視察、各種イロゴイやキッギョの美事さに感嘆す（八・二九）。喜寿の川村多実二会長を迎え　日本陸水学会富山県内在住会員の第一回研究発表会を開催（一〇・二）。この学会の横浜における全国大会総会の席上、提案の北陸支部設置承任さる（一〇・二三）。学会第三日目相模湖見学の途、アビコ取入口で世界一の清澄さという自然水を見る（一〇・二四）。標高二四〇五Mの立山ミクリガ池湖畔で、上野益三・山元孝吉両博士らと仲秋の名月を鑑賞（一〇・五）。黒崎西鉄副社長夫妻を日本晴の立山弥陀ガ原に迎えて大高原の秋色を探る（一〇・一九）。日本山岳会及び日本野鳥の会に入会。「教養微生物学」（五・一）及び「立山山系の湖沼」（一〇・一）を出版。

図5　1961年，1962年の年賀状＜原寸＞

ろっている。それらのほとんどは，例えば，「一九六三年元旦　賀正　一九六二年身辺メモ…」として42字15行に，こまごまと昨年の事が書かれている。前掲の「天の夕顔」の文学碑の事もここにうたわれている。これらの年賀状を並べて拝読すると，およそ40年にわたる先生の年譜さながらで一層慕わしさがつのる。ここに全部を掲げさせて頂けたら…とさえ思う。が，それも出来まい。次に部分的内容のいくつかを転記することをお許しいただき，先生の在りし日のおもかげをしのぶよすがとしたい。

28年の賀状には，年賀の詞のあと「さて私共夫妻富山に在住すること，はや廿五年，若い人達を相手にほんとうに幸福な日々を過して参りましたことを　心から感謝いたしております。一昨年の夏からは毎夏立山々列の湖沼を探り　自然の扉を叩いては大きい教えを享け…（後略）」。この賀状をはじめ，ほとんどは縦書き，活版刷り。

31年の賀状には，「…農林省の告示により立山鳥獣保護区設定　可愛いいヤマネ・モモンガ・カゲネズミ・トガリネズミ・ヒメヒミズ・オコジョ等の小形獣類をはじめ　五色ケ原に巣を営んでいるアマツバメ・イワツバメのほか…（中略）。黒部峡谷猿飛のサル　立山雷鳥沢のライチョウ　畜生平のカモシカ等それぞれの地名にふさわしい自然動物園の夢が実現されるよう　観光立山一帯が安らかな鳥獣の一大楽園として展開される日の近からんために…（後略）」

33年の賀状には，「最高級の文化財　立山の自然を探ること　すでに30年　ますます　その美しさに魅せられて　心たのしく…」。これは珍しく横書き賀状。

34年の賀状には，「日本のご皇室に　はじめて　正しい田に咲いた　いと美わしくも智にすぐれた花の迎えられる　ホホ笑ましい年のはじめのお慶びを　心からお祝いいたします　一九五一年　元旦」。これは全文。

45年の賀状には，「一月一三日富山県はたちの集いに（県教育委員長）。（中略）。五月二六日から本県に両陛下をお迎えし，頼成で全国第二十回の植樹祭が…（中略）。林業試験場で「お手播行事」どちらにも招待さる。また立山美女平に飼育中のライチョウ，カモシカご見学の先導役…（後略）。『花』は自分の美しさを知らない　ゆえに美しい」

47年の賀状には，「昨年のメモから…一月元旦初詣富山歩こう会。（中略）四月二九日春の叙勲で勲三等旭日中綬章を受け，十二日（五月）夫妻参内豊明殿で天皇陛下に賜謁。（後略）。『山』人事憂楽有り　山光古今無し」

48年の賀状には，「昨年のメモから…（前略）。八月二二日より四週間富山郷土博物館で『立山の自然　三人展』（中野峻陽氏山岳・進野久五郎氏植物・私は動物と陸水）。（後略）　母なる自然を愛し　大切にいたしましょう」

52年の賀状には，「（前略）。冬・『おおやま国体』にご来県の皇太子明仁親王さまのお招きで，二月十五日夜，名鉄ホテル八階特別室において約三時間歓談の後，ハゼ科魚類に関する十六冊のご論文を拝受した。（中略）。夏・（中略）巧玄出版から編著『富山の動物』（この愛すべき仲間たち）の初版を発行，（後略）。」

54年の賀状には，「2月7～19日　第1回立山厳冬期雷鳥調査（総隊長として留守役）。（中

略）。　１１月１８日　富大フイル管弦楽団第１９回定演（市公会堂約１００名出演）北陸で初演といわれるチャイコフスキー第１番（冬の日の幻想）ほか。（代表）」。この年賀状は珍しく横書き，そして記載事項は甚だ少い。

５８年の賀状には，「…昨年のメモのうちから…・月例の富山県動物生態研究会には皆勤。（以下略）」。例年になく記載事項が少く，各行短く，それが僅か７行。先生の年賀状としては何となくさびしい。

6　御高著「太刀の高嶺を仰ぎつつ」

昭和４０年３月，富山大学教授を停年で御退官。翌４１年１１月の御出版である。

内容は，「科学時代に生きる」「生物のお国じまん」「ライチョウ」「越の犬」「天の夕顔」「郷土の自然保護」「氷見の大イチョウ」「立山の七湖沼を探りて」「富山湾の海底を探る」「義宮殿下に随伴して」「皇太子殿下ご夫妻立山ブナ林ご散策」「かてい時評」「映画評」「結婚の科学」等々これまでに各種の雑誌・会報・新聞紙上での発表・講演，テレビ・ラジオの放送その他多彩。それらの総括版であって，御自身「ゆかたがけの随筆集」とおっしゃっている。読み始めると止められなくなる。何日かして，何年かして，何十年かしてまた読んでみたくなるであろう。そんな本である。部厚く４００ページ余りの大冊。いつも，わが家の書架を飾ってくれている。本の扉に「謹呈　山岡正尾学兄　恵存　一九六七・二・二〇　著者」と達筆で書かれている。まことに伸びやかで美しく，さわやかさと気品あふれる文字に魅了される。そして，更に先生への思慕深まるを感じる。

ともあれ，こうして過ぎた年月を追ってみると，感銘の思い出はつきない。まだ書いてみたいことに，氷見の女良村の民宿，虻ケ島に建てられた実験室，大日山稜の富高ヒユッテ，浄土山頂の山小屋，昭和１９年秋「中理臨講」中に起きた台風（塩風）による富高構内の植物，特に中庭のダイコン畠の塩害調査の記録などがある。すべて，先生を偲ぶよすがではあるが割愛するとして，心から御冥福を祈り上げたい。

＜心のたけを現す言葉不足を詫びつつ'91.平成03.03.21記＞

4　植木先生に学んだ頃

本　崎　正　富

恩師　植木先生　逝きて約二年になります。私が生物学に足をふみ入れるきっかけは、植木先生です。先生との出合いは、学生時代、週二時間の講義にはじまります。「発生と遺伝」の名講義には、興味と関心、眸を輝やかして聞き入ったものでした。当時の学生諸兄、今もってそれを語り草としていることでもうかがえます。

やがて教職につき、数年を経ずして新制中学の発足がありました。時を同じくして戦後の教育の充実と教職員の資質向上のため、再教育、再研修が行われ始めました。その一つとして、文部省科学教育研究室が旧制富山高校に設置され、はからずも第３期研修生（註１）として、昭和２３年５月１０日から９３日間、毎日蓮町校舎に通うことになりました。その時の主任教授が植木先生でした。生物学専攻が一人だったのでそれこそマン・ツ・マンの教えを乞う結果となったのです。他に、林　良二教授（理博、ヒトデの権威で昭和天皇に御進講、故人）米山　穣助教授（植物学、野生酵母菌と醗酵の権威、後に広島大に転職、故人）からも指導をうけました。

私の研究テーマは、「両棲類の雌雄性の差異」、カエル、イモリを素材として研究いたしました。「研究の方法」は、多忙な講義、先生自体の研究などの合間を殆んど費やして指導していただきました。特に昼は、食事を相対して頂きながら学究の話しを受けたものです。食事を一緒にいただける「あたたかさ」が指導のあたたかさに通じたものでした。それがまた、先生の人柄の良さであったと思います。しかし林　教授の顕微鏡の取扱いのきびしさ、妥協を許さぬ研究態度など、自然科学を志すものに多くの指差を与えて下さいました。

そのころ富高の生物部室（私もその一員でした。）には、植木先生、林先生、米山先生の直接指導を受けている学生がいました。室長は三年生の高浪君（京都大学へ　現在京都大学教授）二年生の石浦君（東北大、大学院へ、現在富山市科学文化センター館長）同じく、中田君（北大へ、前石川県農試場長、黒部市出身　現在金沢市在住）です。仲良く部室内で楽しく過させていただくと同時に貴重な助言をいただきました。牛島の運河（富山駅うら）から、ウシカエルを捕ってきて、ライスカレーの肉として料理し、美味さに舌づつみをうったものです。植木先生が「ヒヨコの肉です。柔かくておいしいですね。」と披露なさったことが今も鮮やかによみがえります。肉の乏しい戦後の一コマです。なおこの時（６月～７月）特別聴講生として、金岡千鶴子（註２）さんなる妙令の女性が矢張り私と同じように登室していたのが想いだされます。（当時の富高は未だ女人禁制であった？）もちろん、ヒ

ヨコのライスカレーを御馳走しました。部室の机の下のバケットにその生々しい残骸をみることがあったら大騒動になっていた…… おいしくいただく彼女の横顔をみながら神妙な顔で喰べている悪タレたち。（大へん失礼）多感な学生時代でした。

私の研究（註３）ですが、植木先生の要点を押えた指導によりどうにか期間内に仕上りました。発表当日私の発表に、我が意を得たりといったニコヤカな顔、未だに忘れることはできません。並いる学科代表教授からも賞讃を得ることができました。学校長清水虎雄先生（註４）、物理学の田代教授、電気の児島教授、生物の林教授等々、鋭い質問を浴せられる方々、そうした席上であっても、他研究生に対しても常に暖かく、そして激励することを忘れられなかったものです。

多くの人々、各界の方々が今も植木先生を惜しむ所以であろうと存じます。本来ならば先生の業績をあげ、追憶するのが本旨かも知れません。あえて机下にふれ、人間味あふる一端を紹介して先生への讃辞といたします。

なお、学友の消息は石浦先生から御教示いただきました。厚くお礼申しあげます。

註１　１．３．５期…は全日３ケ月間登室研究生、２．４．６期…は毎週木曜登室１ケ年生。

註２　金岡又左エ門氏のお嬢さん、植木先生への特別依頼聴講生、現金岡幸二氏令夫人。

註３　研究論文、「両棲類の雌雄性の差異」付「イモリの奇形について」は、文部省科学研究室刊、「研友会誌」№３に掲載

註４　学校長、清水さんの父君は、有名な憲法学者、虎雄さんは名前と違ってその頃流行し始めた、ＮＨＫ　のど自慢に出場、サンサンデー　モニング…… と歌って多鐘合格された人、勅任官校長（その頃この制度がまだありました？）として威厳ある半面、大へん大衆的でありました。

故坂下栄作先生を偲ぶ

1.　故坂下栄作先生の本学会と生物研究に対する執念

本　多　啓　七

坂下先生は84才の生涯を終えるまで、この富山県生物学会の発展を祈ってこられたことを思い出されてなりません。敗戦間まなくこの学会の事務局を引き受けて下さいました。また、学究的な立場で絶えず研究を続けられ、毎年の研究発表会には必ずその成果を発表されわれわれに対し無言の示唆を与えて下さいました。何時も変らぬ若々しい研究意欲に燃えておられる学究態度に深く敬服されるものがありました。先生のこれらの思い出を次に述べて生前を偲びたいと思います。

Ａ．先生が引き受けられた当学会の事務局は二回あった。

①学会復活の際の事務局長 ── アジア太平洋戦争中は約５ケ年近く学会の活動を停止していたが、敗戦と同時に会員一同が集ってこれからの日本復興は理科教育の振興が基盤であるとの気運が盛り上がり、早急に当学会の活動を開始することを決定した。この会員の中心には進野先生を、また事務局を富山県中学校の総元締である富山中学校に置き、生物教師の坂下先生をその世話役にお願いした。敗戦の物資欠乏の折にかかわらず事務局長として多忙の事務をこなして下さいました事に対し深く感謝申し上げます。

②第二回目の事務局長 ──これは植木忠夫先生が当学会の第三代の会長であった際で、坂下先生が退職後、富山女子短大附属高校に再度生物教師となられた際、三年間事務局長をしていただきました。この途中の事務局は富山中部高校、富山大学、県理科教育センター、上市中学校などと移動したあげくのもので、如何に事務局の仕事が多忙で繁雑であったかが痛感されます。

Ｂ．学会の研究熱の必要を常に示された先生。

①温泉生物の大家 ── 先生は戦前、九州の温泉都市別府の中学校生物教師として温泉生物の研究に専念され、帰県後は県下の温泉生物の研究をされ度々発表も行われ大いに期待しました。

②富山県生物分類表の発刊 ──当時としては画期的な印刷物でありました。

③歯に関する大家 ── 先生は退職後、富山女子短大附属高校の生物教師として活躍され、特に生物クラブでは歯の研究の指導に当られ、日本学生科学賞で中央に出品されたこともありました。先生はこれを契機として歯の研究を本格的に行われ、昭和６１年頃まで続けられました。この成果は当学会はもちろん中央の歯の専門学会に於いても高く評価される程の魅力的でしかも斬新な研究内容でありました。これも先生の研究に対する執念のあらわれと思われます。

以上のように先生は当学会では忘れることの出来ない重要な人材でありました。しかも常に当学会の発展を祈って下さいました。ここに先生の功績をたたえ、心からご冥福をお祈りします。